

次号予告

とびら 迷いのままに..... K. N.

特集=ホームプログラム

脳卒中の場合..... 伊藤病院 高橋輝雄・他

脳性麻痺の場合..... 栃木県身体医療福祉センター 吉江利英子・他

リウマチの場合..... 慶大病院 藤沢しげ子・他

随想/脳卒中..... 都養育院 松村 秩
洞爺協会リハセンター 前田 守

／脳性麻痺..... 札幌肢体不自由児総合療育センター 大塚 欣 壮
都神経科学総合研究所 森 山 早 苗

／リウマチ..... 伊東温泉病院 川 口 良 二
東大病院 木 村 信 子

第9回日本作業療法士学会印象記..... 国立身障センター 澤 治 子・他

講 座 運動学シリーズII「肩・肘・手関節の Kinesiology」(2)

..... 府中リハ学院 金 子 翼

精神科 OT の展開 精神分裂病のリハビリテーション (2)

..... 世田谷リハセンター 宮 崎 和 子

コメント..... 府中リハ学院 鈴 木 明 子

資 料 国家試験問題・模範回答 (IV)

雑誌レビュー 1974 年度 AJOT まとめ..... 横浜市大病院 生 田 宗 博

1974 年度 Occupational Therapy まとめ..... 東大病院 木 村 信 子

編集後記

脳性まひの治療は Phelps, Deaver, 高木憲次, Bobath, Vojta, Rood という人達によっていろいろな治療法が開発され、その状況は混沌としているともいえる。

脳性まひという障害に対するアプローチはその障害のレベル, handicap, disability に対するものから neurological impairment に直接アプローチする方法へと大きく変わってきており、その変遷はある意味で PT, OT の技術の進歩、発展と密接な関連をもっているといえる。

今から 60 年前の高木法理念「脳性治療」はそのまま現在でも生きており、寺山論文に詳述されている。

Bobath 法もわが国で講習会が開かれて、いっせいに広まった感があるが、その質的レベルはまだ問題であるし、その効果もデータが発表されていないため、確定していない。近い将来発表されることが期待される。

Bobath 法に次いで、Vojta 法も一部の人のによって導入され、まだその日は浅いが、本年 9 月、京都で講習会が開かれることになっているが、これも急速に広まってゆることが予想される。

Bobath, Vojta 法ともに超早期治療、発達段階に沿った治療法という同様な原理に立った療法であるが、これらが、わが国でどのようなかたちで普及し、共存し、統合してゆくかはセラピストにとって大きな課題でもあるし、関心でもある。

Bobath, Vojta 法の相異については佐竹論文において述べられている。

本号から上肢の運動学のシリーズIIが講座として始まるが、大いに期待したい。

最後に元 PT 協会会長で本誌の元編集委員であった野本卓氏が 3 年間の闘病生活の後 8 月 24 日とうとう亡くなられた。氏の御冥福を祈って筆を置く。

(松村 秩)

<編集顧問>

天 児 民 和
九州労災病院長

五味 重 春
府中リハビリ学院長

砂 原 茂 一
国立療養所東京病院長

津 山 直 一
東京大学教授・整形外科

水 野 祥太郎
川崎医科大学学長
(五十音順、以下同じ)

<編集委員>

上 田 敏
東大リハビリ部

荻 島 秀 男
都養育院リハビリ部

佐 藤 馨
神奈川リハセンター

鈴 木 明 子
府中リハビリ学院

谷 岡 淳
自治医科大学

田 村 美枝子
清瀬リハビリ学院

寺 山 久美子
都心障センター

松 村 秩
都養育院リハビリ部

<編集同人>

明 石 謙

大 井 淑 雄

大 川 嗣 雄

大 橋 博

鎌 倉 矩 子

紀 伊 克 昌

小 林 夏 子

駒 沢 治 夫

佐 藤 剛

田 原 澄 彦

富 岡 詔 子

奈 良 勲

藤 沢 しげ子

藤 本 欽 也

前 田 守

松 本 妙 子

矢 谷 令 子

山 下 隆 昭

横 山 巖

和 才 嘉 昭

(担当 細田・松橋)